

特集にあたって

わが国における外傷診療は、外傷初期診療指針（JATECTM）および病院前外傷診療指針（JPTECTM）が確立されて20年近くが経過し、さらには外傷専門診療ガイドライン（JETEC）もコース設定され、その標準化が革新的に進んできました。そのようななか、外傷診療での診断・治療方針の決定において画像診断の位置づけは大変重要であり、各種研修コースなどでも画像検査のタイミングや読影について、標準化教育の一要素として取り上げられています。また最近では、本誌でも特集記事（2020年5月号）として取り上げた“ハイブリッドERシステム”の普及によって、外傷の診断手順と画像診断のあり方さえも、変化を遂げつつあるところです。そのうえで実臨床の現場では、限られた時間のなかで診断に必要な不可欠な画像検査手段を選択し、適切に診断すると同時に、画像所見から緊急度・重症度を評価することも求められます。このように画像診断は、外傷診療において診断・治療・時間短縮のカギを握る、非常に重要な要素であることは間違いありません。

さて、このように外傷診療のカギを握る画像診断ですが、救急疾患・緊急病態に関する「画像アトラス」については、本誌でも各成書でもこれまで何冊も出版されてきた一方で、「外傷の画像診断」だけに焦点を絞り、網羅的に取り上げたものはほとんどありませんでした。そこで、2021年後半の『救急医学』増刊号となる今号では、「外傷画像診断アトラス2021」と題した特集を企画いたしました。今号では、とくに画像検査が診断・治療方針決定のカギとなる外傷例、および外傷に伴う合併症例を網羅的に取り上げ、実際の症例画像を多数ご掲示いただくとともに、その所見とそれに基づく診断・治療方針決定などについて、外傷診療および外傷画像診断において第一線をひた走る先生方にご執筆いただきました。

これだけの外傷症例画像が集まった特集は、間違いなく他に類をみないものです。この貴重な一冊が、次世代を担う若手救急医、外傷外科医、放射線科医をはじめとする読者に大いに活用されること、そして外傷診療の歴史のなかでも重要な位置づけとなることを信じて、本増刊号をお届けいたします。

『救急医学』編集委員会

企画担当：筑波大学医学医療系救急・集中治療医学 井上 貴昭